

# 第1章 薩摩半島



仁田尾遺跡（松元町）

## 第1節 先史・古代の薩摩半島

薩摩半島は中央部を南北方向に尾根が連なっており、そこを境界として東西に向かって下っている。この尾根は東側の鹿児島湾に片寄っているため、東側は急傾斜で海へ下っており、海岸線付近に狭いシラス台地が連なる。逆に西側はゆるやかに東シナ海へ下っており、尾根近くまでシラス台地がせまっている。このため、西海岸へ注ぐ万之瀬川を除くと全体的に河川の長さは短く、平地が狭い。半島の南側は尾根が切れ幅広くゆるやかな台地が続いており、指宿付近には阿多カルデラ・開聞岳・池田湖・鰻池などの古い火口が各所にみられる。海岸線はともに砂丘が続いているが、野間半島だけはリアス式海岸となり、シラス台地もほとんどみられない。

この地は早くから調査研究が行われたため、多くの土器型式に遺跡名を残している。縄文土器には前平・吉田・石坂・深浦・春日・指宿・市来・草野・上加世田・黒川などが、弥生土器には高橋・入来・北麓・一の宮・松木藪などが、古墳時代に成川・中津野・辻堂原・笹貫などの型式名・遺跡名がある。

### 1 旧石器時代

鹿児島市から松元町にかけての台地では旧石器時代から縄文時代早期前半にかけての遺跡が多く存在している。松元町仁田尾遺跡はナイフ形石器文化期と細石刃文化期の各種の石器群が多量に出土しており、九州最大級の遺跡として知られている。

県内でも発見例の少ないシラスよりも下位の後期旧石器時代前半期の遺跡として、喜入町帖地遺跡や松元町前山遺跡などでナイフ形石器など各種の石器が出土している。

シラスよりも上位のナイフ形石器文化期の遺跡としては喜入町帖地・指宿市小牧3A・枕崎市奥木場・松元町仁田尾・同宮ヶ迫などがあり、剥片尖頭器・両面加工尖頭器・三稜尖頭器・ナイフ形石器・台形石器など多様な石器で組成される。仁田尾遺跡ではナイフ形石器やその製作途中の破片などの集中した場所が40か所以上発見されている。

細石刃文化期の遺跡には鹿児島市加栗山、喜入町帖地、知覧町登立、松元町仁田尾などがあり、仁田尾周辺は仁田尾中A・仁田尾中B・朽堀など複数の

遺跡が連続して存在しており、かなり広い範囲で数十万点もの石器・石片が出土している。指宿市水迫遺跡では住居跡と考えられるもの、道・炉跡と考えられるものなどの遺構群が発見されており、仁田尾遺跡や鹿児島大学桜ヶ丘団地遺跡群では落とし穴が発見されている。また、帖地遺跡では両面加工の神子柴型石槍に類似したものも出土し、文化の広がりや研究する手がかりとなっている。

### 2 縄文時代

土器や石鏃が出現し始める時期、鹿児島市から松元町にかけての台地帯には多くの遺跡が存在している。鹿児島市加栗山・加治屋園・横井竹ノ山、吹上町塚ノ越、松元町仁田尾・前原などの遺跡では、無文・粘土紐貼付文・細い突帯文などの施された土器や、上面が平らな石皿、磨石、小型三角形石鏃などが出土している。やがて、人びとは定住し初め、土器の突帯は幅広くなる。鹿児島市掃除山、加世田市柗ノ原・志風頭などがこの時期の遺跡で、掃除山遺跡では竪穴住居跡2軒、連穴土坑1基、配石炉6基、集石3基などが、柗ノ原遺跡では連穴土坑8基、配石炉4基、集石22基などが発見されている。志風頭遺跡でも連穴土坑、配石炉などが発見されているがここでは大型の完全な深鉢も出土している。

そのうちに、こうした数軒の住居は複数に増え、ムラを形成する。鹿児島市加栗山遺跡では竪穴住居跡17軒、連穴土坑33基、土坑45基、集石17基などが、松元町前原遺跡では竪穴住居跡27軒、土坑（連穴土坑を含む）約240基、集石18基などが、伊集院町永迫平遺跡では竪穴住居跡9軒、土坑495基、連穴土坑3基、集石12基などが発見されている。これらすべてが同時に存在したとは考えられないにしても、これらのムラは道まで存在するような複数の施設をもつ安定した定住集落である。道跡は前原・永迫平遺跡などのほかにも伊集院町上山路山遺跡でも発見されており、これらは1本だけでなく複数あり、それぞれの集団ごとにそれぞれの道があった可能性もあり、共同による作業が行われたようである。

前期には九州の他地域と同じように深鉢の底は丸くなり、笠沙町西之藪遺跡などでは西北九州系の土器とともに、石器の材料として西北九州産の安山岩

が多用されるようになる。この時期には玦状耳飾と呼ばれるイヤリング形の耳飾りが全国的に使用されているが、西之蘭遺跡や金峰町阿多貝塚などでも滑石や蛇紋岩などで作られたものが出土しており、広域的な文化圏に組入れられたことがうかがえる。

中期になると全国的にキャリパー形をした深鉢が出てくる。南九州のものは春日式土器と呼ばれ、この土器は鹿児島市春日町・穎娃町北手牧遺跡など薩摩半島では広い範囲で出土しているが、特に穎娃町の山裾には多く出土している。この時期にも鹿児島市鹿児島大学郡元団地・山川町成川・松元町仁田尾遺跡などで玦状耳飾が出土している。

後期の前半は鹿児島市木ヶ暮・山ノ中など山間部に多くの遺跡が所在し、磨石・石皿など木の実の粉食用具が多く出土している。やがて中頃になると鹿児島市草野貝塚、指宿市橋牟礼川、笠沙町西之蘭、吹上町白寿、市来町市来貝塚などの遺跡のように海岸部に多くの遺跡が所在するようになる。特に、西之蘭や白寿などはこの時代になって進出した遺跡である。この時期は草野貝塚や白寿遺跡・市来貝塚などのようにごみ捨て場が存在するようになり、草野貝塚・市来貝塚では多くの貝が食用とされたようで貝塚もできる。これらの貝塚では釣針や銚先、舟形の軽石製品など漁撈に関する資料も多く、マダイ・カツオ・ハタなどの魚骨、モクハチアオイガイ・アサリ・スガイ・バイなどの貝類も多く出土している。また、福田KⅡ式・彦崎KⅡ式・鐘崎式土器など瀬戸内・北九州系の土器や、ゴホウラ・オオツタノハなど南海産の貝も出土していることから、この頃に海と深く係わり、広い交易のあったことが予測できる。草野貝塚や白寿遺跡では性格がはっきりしないが、円形や楕円形の土坑群が発見されている。草野貝塚のものは指宿式期4、市来式期39、草野式期3であり、直径1～3m、深さ10～70cmと大きいものがあるのに対して、白寿遺跡のものは市来式・草野式土器に伴い16基あり、直径120～150cm、深さ30～40cmと小さく深い。白寿遺跡では土坑内から管玉と台付浅鉢が出土しており、草野貝塚では舟形や人形・獣形など多種多様の軽石製品が出ており、いずれも祭に使われていたらしいことがわかる。指宿

市大園原遺跡では線刻画の描かれた土器もある。このような祭の道具らしいものと同時に、各地で出土している台付浅鉢の中には赤や白で塗られた彩色土器も多く、このことは色を使用した豊かな文化の存在を示している。動物の骨や牙・歯でできたかんざし・耳飾り・垂飾り・腕輪などのアクセサリも多様である。また、この時期は磨消縄文という全国的に広がっている文様が鹿児島にも伝わり、縄文という全国的な文様のほかに、縄目の代わりに貝殻を使う疑縄文という文様が県内各地に広がっている。と同時に深鉢は貝殻文、浅鉢は縄文という器種による文様の違いも見られる。

晩期になると、上加世田遺跡では大きな穴の中で玉造りや、軽石製の人形・土偶等を用いた祭祀行為が行われている。この時期になると県内各地で穴掘り具と考えられている打製石斧が多量発見されており、このことは原始的な農耕があった証拠とも考えられている。上加世田遺跡でも多量の打製石斧が出土していることから、この大きな穴で豊作を祈る祭のあったこともうかがえる。また、緑泥片岩など緑色の石を使った玉造り行為が県内各地で行われており、北陸地方と並ぶ国内の二大産地ともいわれている。上加世田遺跡でも管玉や丸玉、磨製石斧などの製品・未製品が多く出土している。ここで作られた製品がどのあたりに広がっているかはまだはっきりしていないが、この地が玉造工房の中心地であったことが考えられる。

### 3 弥生時代

稲作農耕は約2500年ほど前、北九州ときほど遅れない時期にこの地にも伝播した。鹿児島市玉里、金峰町下原遺跡などではこの頃の石庖丁・壺・粃圧痕のついた底部などが出土しており、平野の奥まった谷部周辺ですでに稲作農耕の始まった様子がうかがえる。やがて鹿児島市魚見ヶ原・金峰町高橋貝塚・日吉町六ツ坪などの遺跡周辺には稲作農耕が定着したらしく、竪穴住居跡や、石庖丁など多くの農具及びそれに関する新しい形の石斧などが発見されている。高橋貝塚では石庖丁や各種の磨製石斧、磨製石鏃など半島系の石器が多く出土している。魚見ヶ原・六ツ坪遺跡などで発見された住居は炉近くに2

本の小さい穴がある半島系の形態をしている。高橋貝塚ではゴホウラ・オオツタノハ・イモガイなど当時北九州で流行した南海産貝製腕輪の未製品が出土しており、貝輪の製作跡ではないかといわれている。いっぽう、東市来町市ノ原遺跡では打製石斧が多く出土しており、半島系の石器が少ないことから、同じ西海岸でも地域により稲作農耕の受入れに違いのあったことがうかがえる。

中期になると金峰町高橋貝塚・尾ヶ原・尾下、吹上町入来・白寿、市来町市ノ原など吹上浜沿岸各地の遺跡で甕棺・壺棺など北九州系の墓が出現している。また鹿児島市北麓遺跡や、入来遺跡では溝を巡らせた環壕集落も見つかっており、北九州と同じように戦乱の起こる危機感もあったことがうかがえる。白寿遺跡や高橋貝塚などにある巨石はこれまで下部に墓壇が見つかっていないため確定はできないが、ドルメンの可能性も考えられている。金峰町下小路遺跡では中から立岩型貝輪が出土した合わせ口甕棺も発見されており、西北九州との密なつながりが考えられている。また、入来・市ノ原などの遺跡ではドンダグリの実が住居内や溝などで出土しており、稲作だけに頼らず、木の実採集生活もいぜんとして続いていたことが想定できる。鹿児島大学郡元団地遺跡では水田や、川の水を堰き止めた木杭列なども発見され、地域によっては本格的な水田耕作が行われていたことがうかがえる。

後期の遺跡は多くないが、加世田市梶ノ原や指宿市横瀬などの遺跡では住居跡群が発見されており、金峰町松木藪遺跡では大規模な溝が台地を横断する環壕集落が想定できる。横瀬遺跡では破片であるが、朝鮮半島製の鏡が出土していることから、このあたりでも権力差のあったことがうかがえる。枕崎市花渡川下流域で発見された滑石製大型石錘は玄海灘などで出土しているものと同じ形・大きさ・石材であり、北九州あたりとの交易があったことを示している。

弥生土器は中期後半になると、鹿児島湾岸では山ノ口式土器と呼ばれる大隅半島系のものが、西海岸では黒髪式土器と呼ばれる肥後系の土器が分布しており、鹿児島湾岸と西海岸では地域差がみられるよ

うになり、この傾向は以後も続く。

#### 4 古墳時代

古墳時代の集落は薩摩半島各地の台地上に所在しているが、鹿児島市鹿児島大学郡元団地・指宿市橋牟礼川・吹上町辻堂原などの遺跡は各地の拠点集落ともなる遺跡である。これらの遺跡では多くの住居跡が発見されており、長期にわたって同じ地で大規模な集落が営まれていたようである。辻堂原遺跡では深い溝が広い範囲を巡っており、集落を区切っている。喜入町野畑・西船子・下大原遺跡などの集落では土錘・石錘や舟形軽石製品など漁撈関係の出土品が多く、耕地の狭い地域のため農耕のほかに生業として漁撈的なものの比重も大きかったらしいことがわかる。飯タコ壺・製塩土器・石錘・土錘・釣針などの漁具は橋牟礼川・辻堂原など多くの遺跡でも出土しており、橋牟礼川遺跡などでは貝塚もできていることから、この地域では一般的に漁撈的生活に依存していたことがわかる。鹿児島大学郡元団地遺跡では川を堰き止めて水田に水を引き込む杭列の施設も見つかっており、5世紀頃には水田耕作も盛んになったらしいことがうかがえる。このことはこの頃になって吹上町入来・金峰町尾ヶ原・東市来町市ノ原遺跡など各地に数軒からなる散村的集落がつくられ始めて、遺跡数が増加していることからわかる。また、5世紀になるとそれまでほとんど見られなかった高坏が増加していることから、稲作の普及に伴いそれまでの共有容器である鉢から銘々の容器である高坏への食器の変化もあつたらしいことがうかがえる。

指宿市尾長谷迫・橋牟礼川などの遺跡では中央に鍛冶炉をもつ住居があり、鉄滓・鉄床石・高坏の脚を利用した羽口・砥石などが出土していることから、5世紀以降には鉄製品の加工技術も進んできたことがうかがえる。須恵器の生産が広まらなかった本県では5世紀後半以降には畿内産と思われる須恵器が移入されているが、薩摩半島でも鹿児島大学郡元団地・橋牟礼川・尾ヶ原・入来・辻堂原など多くの遺跡でこれらの須恵器が出土している。また、樽形甕・坏身など須恵器の形を模した土師器も各地で出土している。

多くの住居跡が発見されている割に、盛土のある高塚古墳は発見例が少なく、指宿市弥次ヶ湯古墳・加世田市六堂会古墳で確認されているだけである。半島南部には土壙墓群がある。丘陵を利用した成川、砂丘につくられた枕崎市松ノ尾・穎娃町高取浜、台地上にある指宿市摺ヶ浜などの遺跡である。これらの墓では刀・剣・鏃などの鉄器等が副葬され、回りに壺や高坏などの土器が供献されている。鉄剣の中には蛇行剣・曲身剣といった特異なものも含まれており、鉄鏃にも形の特異な異形鉄器と呼ばれるものがあるなどこの地域の特殊性を見せている。

この時期の土器は脚台付きの甕、貼付突帯のある長胴の壺、丹塗りの高坏など南九州独特のものであるが、壺にある貼付突帯は鹿児島湾岸のものが幅広くかまぼこ形を呈するのに対して、西海岸のものは幅がやや狭い。また、吹上浜沿岸では、丸い形をした丸底を呈する肥後型甕も金峰町芝原遺跡や東市来町池之頭遺跡などで出土しており、海を介した広い範囲の交流がうかがえる。古墳時代を通じて土器の変化はあまりなく、8世紀頃まで似たようなものが使われている。

## 5 奈良時代以降

古代の薩摩半島は阿多の地域であり、日置・伊作・阿多・川辺・穎娃・指宿・谷山・鹿児島の8郡からなっているが、これらの役所の位置は現在のところはっきりしない。ただ金峰町小中原遺跡では「阿多」の刻書土器や、帯金具などが出土し、掘立柱建物跡も多く発見されていることから阿多郡の郡役所の可能性も考えられている。また、指宿市橋牟礼川遺跡では「府」・「真」などの墨書土器や、丸軛・巡方・硯などが出土し、多くの掘立柱建物跡が発見されている。同じ台地の敷領遺跡でも亀トに伴うと考えられる「圭」形の鉄製品や墨書土器などが出土していることから、この周辺に指宿郡の役所があることも考えられている。市来町安茶ヶ原・同市ノ原・伊集院町山野脇などの遺跡では四面、あるいは二面に庇のある建物跡があり、鹿児島市一ノ宮神社・市ノ原遺跡などでは「厨」の墨書土器があり、役所とのかかわりも想定できる。また、加世田市上加世田遺跡でも中央の軍事的氏族である「久米氏」

とのかかわりが考えられる「久米」の墨書土器が出土している。

金峰町中岳山麓古窯跡群は数十基の須恵器窯からなる窯跡だが、須恵器壺・甕などの形態・製作方法などから肥後とのかかわりが考えられ、とともに近くの芝原・上水流・渡畑などの遺跡で出土している石帯・緑釉陶器・多口瓶・瓦や多量の須恵器などから考えると、須恵器の積み出し場所として薩摩国府・国分寺との深いつながりも考えられる。

薩摩半島では金峰町新山上橋ノ丘や白樫野などの遺跡で8世紀頃の蔵骨器が出土しており、仏教文化が早くから浸透していたらしいことがうかがえる。平安時代になると指宿・加世田など広い範囲で蔵骨器の出土が見られる。また、山川町福元岩陰遺跡では崖葬と思われる埋葬跡もあり、中国製の鏡も副葬されている。

874年の開聞岳噴火による火山礫の堆積は当時の指宿地方を覆っており、橋牟礼川・敷領などの遺跡では畝を残した畠の跡がその下で発見されている。こうした畠の跡は金峰町芝原・持躰松遺跡などでは河川氾濫の跡でも残っている。

万之瀬川下流域の芝原・持躰松遺跡などでは平安時代後半から鎌倉時代頃の中国製の青磁・白磁や、常滑焼・備前焼・カムイヤキなど国内各地の陶器が多量に出土しており、この一帯が交易の拠点ではないかといわれている。鹿児島市谷山城・皇徳寺城など各地の山城でも多くの陶磁器や古銭などが出土している。

(池畑耕一)